

正法眼藏——感應道交の世界——

田 中 敬 信

道元禪師の「正法眼藏」に於ける「冥資」と「その世界」及び「展開」との関連として、「感應」・「感應道交」を参究してみますと。

「感應」・「感應道交」の意味

「感應」とは、……感じ応ずる意・感応道交のこと、

仏と修行者との心が相交流すること、衆生の信心・菩提心が諸仏・菩薩に通じて、その力が現われること、

感はわれわれの方からいい、

応は仏の方からいう。

衆生の信心のまことに感じて、仏・菩薩がこたえること、

「感應道交」とは、……仏と衆生の関係をみると、衆生に機縁があれば、仏の力が自然とこれに応じ、衆生の感と仏の応とが互に交融する。

禮拜得髓」の巻

「一向に佛法に身心を投ぜんことを、ふかくたくはふるころとせるは、佛法かならず人をあはれむことあるなり、お

ろかなる人天、なほまことを感ずるおもひあり、諸佛の正位いかでかまことに感應するあはれみなからん。土石沙礫にも、誠感の至神はあるなり。」と「禮拜得髓」の巻に「感應」の言葉が述べられています。これは、

「ひたすら佛法に身心を投げ入れようと、深く心に決め（ようとす）れば、佛法はかならず、その人に憐えみを与えずである。愚かなこの世の人でさえ、なお誠の心を感じるのである。諸仏の位にあるものがどうして、至誠に感応する心がなからうか、（ないはずはない、いやかならずある）土石、沙礫にも誠を感ずる心はあるものである」と云う事です。ここで、

「一向に佛法に身を投ぜんことを、ふかくたくはふるころ」

という所が「衆生の信心のまこと」にあたり「衆生の信心のまこと」に應じて、仏・菩薩が応じるという事への「信」が述べられています。これはあたかも、

「ただわが身をも心をも、はなちわすれて、」と同様のことで、この様なとき「衆生の信心がまこと」となるわけです。そうして「佛のいへになげいれ」たとき、「佛のかたよりおこなはれて」……仏の応があつて、「これにしたがひもてゆくとき」

「感應道交」の世界がひらけて行くのです。

「身心學道」の巻

次に「身心學道」の巻では、

「また感應道交して、菩提心をおこしてのち、佛祖の大道に歸依し、發菩提心の行李を習學するなり」とあります。ここを「御抄」では、「感應道交ノ詞水澄ハ天月ウツル水不^{ノホラ}昇^{ノホラ}降^{ノホラ}トモ^{ノホラ}鉢用和合シ機感相應シヌレハ水ニ月ノウツルカ如ク衆生ノ心水清ク澄ハ法性ノ月心水ニヤトルト云是ハ打任タルタトヘ尋常ニ談スル心地ナリ是ハ能所アリ彼此相對ス難云佛法所詮佛祖所談之感應道交ト云ハ佛性コレ佛性狗子與佛性アハヒヲ以テ感應道交トハ云ナリ菩提心ヲ發テ後佛祖ノ大道ニ歸依シ發菩提心ノ行李ヲ習學スルナリト云ヘハ前後ヲタテタルヤウニ聞ユレトモ不可有前後發菩提心則心ナリ歸依則心ナリ前後モ皆心ナルヘシ」と述べられています。この事は、「感應道交」すれば、「菩提心」がおこり、「菩提心」がおこれば「佛祖の大道に歸依し」「發菩提心の行李を習學する」と云うわけです。しかも、これらの事柄には前後があるわけではなく「菩提心」がおこることは「感應道交」したこと

であり、「佛祖の大道に歸依し」たことであり「發菩提心の行李を習學する」わけです。

「發菩提心」の巻

「しかあれども感應道交するところに、發菩提心するなり、諸佛菩薩の所授にあらず、みづからが所能にあらず、感應道交するに、發心する……」と述べられています。

これは、先の「身心學道」の巻で述べられていた様に「感應道交」するところには「發菩提心」がともなっている事を重さねて述べられているわけで、これがさらに「菩提心發」となるわけです。この「菩提心」「發」は「感應道交」するところですから、それはまさしく「感應道交」の世界であると云えるわけです。

「菩提心をおこすといふは、おのれいまだわたらざるさに、一切衆生をわたさんと發願しいとなむなり」と云う事も「感應道交」の世界であるわけです。

「歸依三寶」の巻

次に「歸依三寶」の巻では、
「たとひ天上・人間・地獄・鬼畜なりといへども、感應道交すれば、かならず歸依したてまつるなり」と述べられています。ここでは、「感應道交」することには「天上・人間・地獄・鬼畜」の区別のない事がわかります。次に「歸依したてまつるなり」とあります。何に「歸依」したてまつるの

か、その前後を拝読いたしますと、それは「佛・法・僧」の三宝への帰依であることがわかります。このことから「感應道交」することは「佛・法・僧」の三宝に「歸依」することであるわけです。

ここまでの事から、前述の所までは「感應道交」することは「發菩提心」であり「菩提心發」であることがわかりました。更にここで「歸依佛法僧」であることがわかります。

「この歸依佛法僧の功德、かならず感應道交するとき成就するなり」

とあります。「感應道交」すれば「歸依佛法僧」するわけですから「歸依佛法僧」すれば「歸依佛法僧の功德」に浴するわけです。「この歸依佛法僧の功德」は「かならず」「感應道交」するとき「成就」するわけです。ここに至つて「感應道交」が「感應道交」をよびおこしている事に気がきます。そうして「歸依佛法僧の功德」は「感應道交」することで、「すでに歸依したてまつるがときは、生生世世・在在處處に增長し、かならず積功累徳し、阿耨多羅三藐菩提を成就するなり」と述べられています。この様に「かならず」「歸依佛法僧の功德」として「阿耨多羅三藐三菩提を成就する」わけです。「無上正等覺」「等正覺」が得られるわけです。

「感應」「感應道交」の世界

「感應」「感應道交」によつて開かれ、えがかれている世

界は、まさに仏法の始りであり全てであるわけです。そうして「感應」「感應道交」の世界は、衆生の「感」に仏が「應」じていることですが、これは衆生自身が求め知る事によつて仏が「應」じている事のわかる世界ではないのです。「感」じ「應」じる事は衆生の感知する事柄でないのです。もし衆生が「感」じたらそれは衆生の「はからい」となつてしまいます。「ひたすら佛法に身心を投げ入れ」たり「ただわが身を心をもはなちわすれ」る事にならないのです。「はなちわすれ」ることは「はから」はないことなのです。だから衆生の「はからい」は何一つ入る事なく「佛に生かさる」「佛に助けられて」いる自己を、感知・覚知することもない世界なのです。だから衆生の「感」に仏が「應」じている事も、ここでは不知なわけです。しかもそれでありながら、仏の冥々なる加護・資助があるのです。これは、

「みな甚妙不可思議の佛化に冥資」せられていることである

「まことに佛祖の冥資にあらざれば」「感應」「感應道交」の世界も有り得べきものでないことを「信受」した時、「感應」「感應道交」の世界にひたりきることが出来るわけです。ここに「冥資」・「冥資の世界」及び「その世界の展開」として、「感應」・「感應道交」の世界がひろがっている事と、拝察されるしだいです。